



# 福島支部会報 39号

## 日本山岳会福島支部

(令和4年7月～9月の活動)

令和4年(2022年)10月15日発行

公益社団法人日本山岳会福島支部

支部長 渡部 展雄

事務局 〒960-8133 福島市南向台3丁目13-9

佐久間 隆夫 気付

電話: 024-521-9561 携帯: 090-2959-4863

E-mail fks@jac.or.jp

### 新型コロナ第7波下の支部活動について

気候変動による異常高温と新型コロナウイルス感染爆発に見舞われた第2・四半期は、支部活動に諸々の影響をもたらした。さらに参議院選投票直前に噴出した政治と新興宗教との関係や、混迷の対コロナ施策による輿論の分断が続いているが、登山ブームは変わらず隆盛と言える。

4月開催の総会決議を受け、公益事業では8月「山の日親子登山」は中止のやむなきに至ったものの、創立120周年記念事業としての「山岳古道調査」については粛々と進めることができた。また共益事業も一部中止の憂き目に遭うも順調な取組結果に終わった。

### 支部活動報告 (2022年7月～9月)

#### 公益事業報告

#### 山岳古道調査・7月～9月の活動

福島支部担当の山岳古道は

- ④ 八十里越え ②六十里越え③会津中街道 大峠
- ④沼田・会津街道 尾瀬越え ⑤太閤道 勢至堂峠 ⑥会津街道 諏訪峠 ⑦会津西街道 山王峠 ⑧飯豊山 ⑨万世大路 栗子峠 の9か所となる。

本調査は令和6年12月までに実査、文書作成を終了させる計画を立て現在まで最重点活動として取組中である。

その内実は活動参加者が特定会員に限られており、各位の積極参加をお願いするものです。

今期(7～9月期)の調査活動は～以下調査対象古道の略称

- ③大峠、⑤勢至堂峠 ⑥旧越後街道 ⑦会津西街道
- ⑨万世大路の5か所について実施することができた。

～詳細下記のとおり

#### ③ 9/28 大峠(会津中街道) 現地調査 ～5名



大峠県境尾根で栃木支部と記念撮

8/11(月)下郷町の会津中街道守る会・佐藤淳一氏宅を訪問。日本山岳会福島支部による昨年来の協力要請に基づき、整備の進んでなかった大峠山頂(栃木県境)までの刈払い(実施者は下郷町森林組合によるもの)を終了した旨報告をいただいた。同山岳古道は昨年9月、第1回目の実査を終了しており、残り県境までの実査を本年9月下旬に実施する日程で合意。この際、JAC 栃木支部が福島支部との協同行動を希望した経緯も判明しこれを実現したもの。

9/28(水)09:00 主催者＝会津中街道守る会、参加団体福島支部5名、栃木支部長以下6名、一般公募による「古道を歩く会」から20名など総勢30名で実査開始。

13:00 大峠山頂着・昼食後下山。15:30 出発地点まで戻り報告集会のあと解散。

今回の調査と昨年9月23日の調査により大峠全行程実査は概ね終了。今後は文字起こしと本部報告作業となる。

参加者: 小林、長谷部、渡部、佐久間、渡邊尋



ヨロイ沢の渡渉箇所

#### ⑤ 7/3 勢至堂峠(太閤道) 住民説明 と調査～2名

7月3日(日)08:00 から勢至堂地区住民に対する説明を実施。太閤道は支部会報第38号(前号)で記載のとおり、

「勢至堂集落(旧宿場)近くの殿様清水に嘗て大勢の人が押し掛け村の安寧が乱された。古道復活には反対する」との声が勢至堂地区住民から市側に寄せられており、須賀川市の仲介で地区住民に対する直接話し合いを実施した。

～渡部、大島現地入り

勢至堂地区森林組合長(12世帯居住代表)との話し合いの結果、古道調査目的の入山については概ね了解を得たが、今後引き続き須賀川市側峠道の調査について協議を継続させる必要性が残された。

「古道太閤道」とは、西暦1590年代の戦国末期に時の太閤秀吉が奥州仕置きを目的に東北地方に進軍、その威光を示して天下統一を果たしたことに由来する。秀吉は小田原の北条氏を打ち破り、2万3千人の軍勢を引き連れ奥州白河城から長沼城を経て勢至堂峠、背炙峠を越えて会津に入場、軍勢の長さは数キロにも及んだと言われている。

今回、「背炙峠」については支部が未調査の存在であったが、同日午後から、会津若松市湊町の郷土史家宅を訪問、それまで把握できなかった「背炙峠」旧道を探し当て、合わせて今後の協力も得ることが出来た。

太閤道については、10月21日再度実査する予定。



背炙峠登り口



正面の山が東山・背炙峠山頂

## ⑥ 9/25 旧越後街道3峠道の現地調査 ～3名

9月25日(日)09:00から丸1日かけて峠道3か所を実査。旧越後街道は新潟県新発田から会津若松鶴ヶ城下までを指す。かつては殿様街道とも呼ばれ、また佐渡金山の金を江戸まで運搬するなど重要な街道であった。

### ① 東松峠

会津坂下町片門地区「天屋宿」から喜多方市西会津地区「輕澤宿」までの約3キロについて実査。峠入口から地元保存会による整備も万全で、崩落した洞門や命名由来の「東松」の遺跡、戊辰戦争時會津藩が築いた塹壕など大切に保存されている。越後街道は明治12年、英国人女性探検家イザベラ・バードが北海道まで旅した道でもあり、山頂茶屋跡からは会津盆地と磐梯山が一望できる。基督教的世界観に基づく見聞録として「日本奥地紀行」を遺し当時の日本を世界に紹介した。何よりも明治初期の日本を追憶できる歴史書である



峠茶屋跡に多くの碑等が残り、磐梯山と会津盆地も見える



道幅広く手入れ行き届く



今は通行不能の洞門

### ② 車峠

西会津町上野尻集落(宿)から同町白坂宿まで約3Km.の峠道。現在の国道49号線「車トンネル」北側に開削されている。上野尻集落(宿)の鎮守「根折神社」から砂利道となり約200m進むと峠入口。手入れの行き届いた緩やかな道を約40分登ると砂利敷きの車道と交わり、その広場が峠の茶屋跡となる。町観光交流協会設置の立て看板には、イザベラが居心地よく茶屋に2泊したこと、日々の生活が描かれている。

ここから先約1.5Kmは藪漕ぎの連続で、現状のままでは山岳古道として推奨はできない。途中、月ノ輪熊と遭遇。悪戦苦闘の末ようやく脱出、白沢宿に到着。

「車峠」の整備について西会津町在住の伊藤尊仁支部員を介し、町当局に刈払い・整備を要請することとした。



車峠入口の標柱



藪に覆われる道



車峠茶屋跡

## ③ 鳥井峠

「車峠」を抜けたところが国道49号線の合流点。その先白坂(宿)、逢坂(宿)へと旧道を進むと「鳥井峠」の入口となる。

新潟県境を過ぎ津川町・八ツ田(宿)まで約2.5キロの砂利道が続き再度49号国道と交わる。「鳥井峠」は山岳古道とは言い難く、始点から終点まで車両通行可能な林道の様相を残したままであった。



鳥井峠入口



旧国道の標識



津川町終点

画像は左から鳥井峠の基点、中央は国道49号線の標識と飯豊山の遠望。右が新潟県津川町・八つ田バス停で奥の国道に出る。旧越後街道3峠の実査はこの日(9/5)を以て終了。

～3峠実査担当者・渡部、佐久間、三浦幸浩～

## ⑦ 8/11 会津西街道(山王峠)現地調査 ～1名

会津西街道は栃木県日光から鬼怒川を経て田島町～下郷町～大内宿(氷玉峠)を越え会津若松に至る古道を指し、そのうちの山王峠以北を福島支部が担当する。



山王峠入口(栃木横川口)



緩い登りが続く



8/11(木)09:30、栃木県横川宿から現在のR121号線山王トンネル脇の古道に入り、約1時間で県境尾根着。登り返して約2時間の行程であった。

山王峠古道は栃木・福島側とも緩い登りで地元保存会の整備が行き届いていた。～実施者渡部展雄

## ⑧ 10/21 万世大路現地調査 ～3名

万世大路は、福島と米沢を結ぶ米沢街道(天文18-1549年開鑿)の2代目街道(幅員約3m)として、明治14年開通した。

時の山形県令三島通庸により二ツ小屋隧道と栗子隧道（482間）を手掘りで開通させ、明治14年10月、明治天皇の東北・北海道地方行幸に際し「この道は万世の世まで栄えあれ」と命名して栄えたが、昭和36年、国道13号線の開通により衰退今日に至っている。

現在は、福島・山形両県地元民により「保存会」が組織され整備されている。

10月21日（金）大滝宿を調査基点として①米沢市側入口から栗子隧道まで6Km、②福島市二ツ小屋隧道から山形県境栗子隧道までの約10Kmを実査。両栗子隧道まで藪漕ぎ箇所もなく整備されており、残り大滝宿～二ツ小屋隧道間は後日実査予定。～実施者 渡部、佐久間、三浦幸



米沢側栗子隧道 右が昭和改築時 左は明治手掘り隧道



入口は閉鎖

手掘りの隧道



福島側栗子隧道入口 崩れて通行不可

## 月例山行報告

### 8月21日～24日北ア・秘境「雲ノ平」登山

支部山行として「雲の平」行きを決意したのは、3年前の薬師岳登山の時。日本の最奥地を歩きたい。そう決意してから3年が経過した。コロナ感染拡大の影響をものろに受けた山小屋にもようやく登山者が戻り始め、その期を逃がさず、ようやく実現できた支部山行。詳細は、支部会報に末尾に添付した。

CL 三瓶恵子（福島支部山行委員会 代表）記

メンバー：佐藤一夫、高田雅雄、幕田芳典、鈴木嘉津雄



## 個人山行紹介

### 9/13～16 穂高岳大キレット越え

9/13(火)徹夜運転で4:00 沢渡着。13:00 槍沢ロッジ着(泊)。

9/14(水)07:00 ロッジ発。09:00 天狗原分岐から天狗池～

### 9/13～16 穂高岳大キレット越え

ババ平～天狗原～天狗池～横尾尾根～16:2 南岳小屋着。  
9/15(木) 6:30 南岳小屋発。天気無風快晴。常念平で御来光を仰ぎ、大キレットを越え挑戦。14:30 北穂高小屋に到着。日没時の夕景を堪能。  
10/16(金)北穂高小屋からのモルゲンローテ。「穂高よさらば」を胸に一挙に下山開始。17:30 上高地に到着



槍ヶ岳と逆さ槍



槍沢



大レットと左奥から前穂、北穂 滝谷、奥穂の峰々

実施者  
佐久間隆夫  
幕田芳典

会員個人山行の詳細は「支部ブログ」に載せませんでした。紙上に日付と抜粋画像1枚のみ掲載します。

- ① 7月16日 月山花紀行 ～小林正典友会員
- ② 8月14、15日 岩手山、八幡平、御所掛温泉 ～小林正典友会員
- ③ 8月19日～20日 大朝日岳 ～小林正典友会員
- ④ 8月20日 御岳山レンゲショウマ ～氏家光政友会員
- ⑤ 10月9日 栗駒山の紅葉 ～小林正典友会員



1



2



3



4



5

## 事務局からのお知らせ

- ① 11月以降の活動計画は未定ですが、11月中旬に霊山青柳山荘で「支部紅葉狩り山行(山荘1泊)」を開催予定であり、支部役員会(下半期)を併せて開催したいと思います。
- ② 10月1日、JR只見線が11年ぶりに全線開通しました。その陰には日本山岳会員で三島町居住「星賢孝」氏の只見線復活への篤い戦いと流域の地域起こしに対する並々ならぬ働きがありました。あらためて会員各位のあたたかいご支援とご協力をお願いします。

## J A C 福島支部アーカイブス

「墜ちるなら富山県側へ」。山男たちにひそかに語られてきた言葉。27年前の平成6年9月下旬、谷口隊長率いる富山県警山岳警備隊の活動拠点立山で開催の「山岳遭難救助訓練」に参加した体験記「その4」です。 渡部展雄 記

### △9月28日(水)朝から大雨

昨日に続き岩壁の途中で負傷した遭難者救助する訓練。バスケットストレッチャーという搬送具に遭難者を固定させ、岩壁を下降する。反対に、ウインチを使って岩壁上部に引き上げる救助方法だ。救助側は5人のチームでこれを行う。チームワークが要求される訓練となった。

次はザイルに宙吊りとなった遭難者の救助方法。救助者が宙吊り現場まで懸垂下降、救助者もその場で宙吊りのまま救助する訓練である。救助者が自分のハーネスに遭難者を結束し、遭難者のザイルを切断すると、遭難者を上から垂らした新たなザイルに結び、宙吊りを解除して行うのがあり、非常に危険な恐怖感を伴う作業。1班はガスで下が見えなくなっている百メートル岩壁でこの訓練を行っていたが、「ギヤー」とか、「ヒヤー」とかの悲鳴が何度か聞こえてきた。

次に行ったのは、遭難者を背負ってオーバーハングを下降する訓練で、雨のため岩が滑ることとハングを通り過ぎる際のタイミングが難しかった。岩壁訓練も3日目ぐらいになると慣れてくる。そこで飛んでくるのが清水先生の「慣れが一番怖い」という注意。実にタイミングが良い。環付きカラビナの環を締め忘れていたりすることがまあり、さすがベテランと感じた。遠く目に見た光景だが、1班を指導していた横山さんは、岩壁の上部に水平に生えている木に仰向けになり両手を枕にして指導しているのを見た。本当に不思議な人。訓練中「こんなことやっているといつか死ぬだろう」などとすまし顔で話していたのを聞いたこともある。

午後5時30分訓練終了。課外講習は人工登攀技術のビデオ鑑賞。その後、担当の先生が明日の訓練について説明、共同装備品を点検準備し午後 11 時ころ時ころ就寝。明日は、1、2 班合同の大がかりな救助作業が待っている。



### △9月29日(木)快晴無風

岩場における訓練最後の日。1、2班が合同チームを作り、全一日をかけ救助訓練実施。雑穀谷 100m岩壁の上部に1班、下部の救出地点に2班が取りつく。岩壁中途テラスに滑落し動けなくなった負傷者を救助するとの想定。長大な6ミリワイヤーを岩壁の上下にしっかりと固定し、それに遭難者をくくりつけ下まで下ろす。いわばミニロープウェーを作って救助する方法なのだが、場所が場所だけに簡単ではない。まず救助装備。メインワイヤーのほかこれを張ったり緩めたりするディスクと滑車、ストッパー、搬送用滑車、スイブル(メインワイヤーのよじれ防止用より戻し)などなど。これを岩壁上部まで担ぎ上げるのがひと苦勞なら、メインワイヤーを張るために岩壁を登ったり下ったり、さらに引っ張り上げたり。設定完

了するまですべて入力が頼り。

実際にどのような救助手順か、簡単に説明してみる。まず遭難者が滑落したテラス上で待機。救助者は懸垂下降で滑落地点まで下り、救助作業に入る。岩壁下部の救助チームは、展張したワイヤーを緩め、遭難現場近くまで垂らす。次に岩壁上部から搬送用滑車をワイヤーに取り付け送り出し、まず救助者が自身のハーネスに固定。次に遭難者を滑車に固定することで救助体制が完了、ワイヤーの張り込みを要請する。下方支点の救助チーム(2班)がワイヤーを張り込むことで自然に宙吊りとなり、ロープウェーが完成する。上の支点から救助用滑車を送り出すと、徐々に両者は下方にゆったりとしたスピードで救助されるという仕組みである。富山県警は、過去の救助現場での実践はなかったとか。群馬県警谷川岳警備隊は何度か経験しているとは谷口隊長の言。

ワイヤーの装着など救助装備の装着が完了し、訓練に入ろうとしたそのとき、横山先生が「2班の人、だれか試験的に下りてくれませんか」と言う。訓練生の最年長者で総代を命じられ、班長の大役もおおせつかった私を前にそんなこと言われたものだから、私も意地になり「下ります。」と答えてしまった。傍らにいた山梨の小林氏が気の毒に思ったのか、身代りを申し出てくれる。それを振りほどくように試験降下することになった。



80キロgのぺこちゃんおじさんを実験台に使ったということで、その後の訓練がスムーズに行われたのはいうまでもない。この日別メニューで訓練中の1、2班以外の研修生もワイヤー救助を体験させることになり、呼びかけたところ7、8人の希望者が集り、何回かに分けて訓練を繰り返した。そのとき横山先生は何とはなしに「あと3個下ろすからよろしく」などと無線で連絡してきたため、まるで品物を下ろすみたいだと笑っていると、オーバーハングの下部に大きな巣を作っていたスズメバチが突如襲ってきて逃げ回ることもあった。そんなわけで、岩壁最後の訓練も和気あいあいの中で終了することになった。谷口隊長も熱心な研修生の態度を見てご満悦な表情を浮かべていた。それが近くこの場所で行われる予定の山岳警備隊訓練に対する警察本部長査察のことを思っただろうかはわからない。

4日間通いつめた雑穀谷に別れることになったが、訓練は諸先生方の二重、二重の安全措置でケガもなく終了することができた。常に最悪の事態(二重遭難)を想定し、一本のザイルが切れた場合でも別のザイルが命綱となり、遭難者と救助者が確保されるという基本原則をしっかり守りとおしている。お互いの信頼関係が日本一の活動を支えているのだ。そんな思いで紅葉の始まった雑穀谷を後にした。

～以下次号～